

## ビバハウス便り NO.82 第1回「ビバハウス卒業生の会」誕生か？

ビバハウス 責任者 安達 俊子

今年は雪解けが遅く、ビバハウスの周りから薄汚れた残雪というよりも、氷の塊が完全に姿を消したのは、4月も半ばを過ぎた頃だった。

待ってましたとばかりに、まわりの木々は大慌てで蕾を膨らませ、クロッカス、雪ノ下、チューリップ、レンギョが競い合って花を咲かせ始めた。中でも、レンギョの見事さと言ったら！太陽を浴びて、ビバの周りを取り囲み、黄金色に輝き、まぶしいほどの光景だ。この時ほど、寒く厳しい長い冬を耐えて、北海道に生きている幸せを感じられる時はない。

春を待ち焦がれていたのは、雪の下の草花ばかりではなかった。苫小牧から、福岡から、京都から、そして埼玉からと次々に懐かしい声の電話が立て続けにかかってくる。ひとりひとりが、忘れられないさまざまな思い出をビバに残して巣立っていった卒業生たちからのものだった。

京都のS私大3年生になっていたSyo君は、人付き合いが苦手な、中学時代から不登校が続いたが、ビバに来て、当時毎週若者たちのために札幌から来て下さっていた札幌市立病院にお勤めの高沢先生に教えて頂いたギターが大好きになり、現在音楽サークルの部長をしているとの事。懐かしい北海道への想いもこめて、『国道5号線』という題の曲も作ったという。でも最近少し疲れ気味なので、普段はビバハウスやその周りの景色を思い出して癒されているが、やはりどうしてもビバに里帰りしたくなかったとの事だった。

初顔合わせのメンバーばかりなので、幾分の不安も感じてはいたが、なんと初日から他のビバメンバーとの会話が弾んでいた。ビバにいた時お世話になった方々にお礼のご挨拶もしたいとの事で、ビバスコレ（ビバ併設のフリースクール）校長の近藤先生のお宅にお伺いし、3時間もお話をさせて頂いたとの嬉しい報告もあった。郡山市からビバに来て、現在町内の老人福祉施設の重要戦力になっている大ちゃんに連れられて、かつてビバのスタッフとして面倒を見てもらった森康彦さんにも小樽でお会いできたと喜んでいました。

遠いところからばかりではなく、北海道の道南からビバに来て、現在は北星高校前の特別養護老人施設で働いているKo君も休暇が取れたとビバに来てくれた。6月になれば埼玉から恵子ちゃんも来るよという、『ぜひ一度卒業生みんなで集まりたい』ということになった。Ko君のように全国全道各地からビバに来て、現在余市に定着して働いている若者は10人を下らない。呼びかけに応じての全国からの若者たちと再会できる喜びを考えると今から胸が高まる。

長いこと大変な苦勞の末について『求職者支援制度』の認定を得ることが出来た。北海道唯一の「農業実践科」として、4月17日、5名の受講生を迎えてスタートした。実質校長役の内田農園主(前余市町農業委員会会長)、北方ベリー研究所所長・佐藤与重郎先生、農民音楽家の牧野時夫先生など素晴らしい先生方をお迎えする事が出来た。3ヶ月間の毎日6時間の厳しい訓練に耐えて、全員が卒業の日を迎えられる事を毎日祈るばかりだ。